



地域の取り組み

熊本だより

熊本地震この1年

NPO法人子育て談話室 柴田 恒美

はじめに

突然の熊本地震発災から1年が経ちました。あの日から次第に少なくなったとはいえ今も余震が続いています。その数も4,000回を超えました。つい先日も震度4の突き上げるような余震がありました。久しぶりの大きな余震で体が反応してしまいました。

全国の皆さんからは発災直後よりさまざまな形での支援を頂き、本当にありがたかったです。この時ほど、日頃の繋がりのありがたさを強く感じたことはありませんでした。KKI（こころの子育てインターねっと関西）を通していただいた皆様よりの支援金は、被災した乳幼児家庭支援のために使わせていただいております。被災家庭のニーズは時の経過と共に変化していき、子育て家庭の支援もこの先まだまだ続きます。

突然の地震（後に前震と呼ばれるようになった）は4月14日（木）午後9時26分でした。わが家では入浴も終わり、部屋でくつろいでいる時間でした。これまで経験したことのないあまりの揺れにただその場にうずくまって揺れが収まるのを待たばかりでした。明るく日は割れて散乱した食器類を片付け、地震の怖さを実感した経験でした。

4月16日（土）午前1時25分、実際は翌晩夜中のことです。前日の恐怖や片付けの疲れもあり、床についていました。突然の突き上げるような揺れにとっさに目が覚め、布団から起き上がり、床にうずくまりました。家が大きく揺れ、さまざまな物が落ちる異様な音が続きました。ゆれが少し収まった間に外に出て、近くの人たちも一緒に車中泊をしました。

発災から3か月

熊本地震発生から3か月が過ぎましたが、まだ余震も続き日常を取り戻すには長い時間がかかりそうです。私たちが運営している事業も震災後3週間ほど停止しました。事業所が避難所になったり、被災して使えなくなったりしたからです。この間、これまで利用していた地域の親子のことが気になり、絵本や折り紙、ちょっとした手遊び道具を持って避難所をまわったり、公園でミニひろばを開いて声をかけたりしました。毎日がこれまでに経験したことのない体験ばかりで不安と緊張の連続でした。

事業が再開したあと、乳幼児親子が集まる場所では、幼児が極度にぐずったり、赤ちゃん返りをしたり、おもしろしたり等、これまでと違う子どもの行動が目に入りました。これらの子どもの様子を見ると、子どもへの対応と平行して彼らに関わる大人のケアが大切ではないかとすぐに感じとれました。



避難所まわりの一コマ

そこです、子どもへは「大丈夫だよ」というメッセージを様々な形で伝えました。抱っこしたり、背中をなでたり、言葉で伝えたり、一緒に遊んで気持ちを受け止めたり…。一方子どもを支える大人、母親や地域で子育てを支援するボランティア、そして私たち支援者自身へは、ありのままの気持ちを受け止め、元気を維持するための様々な思いつく方策を考え、周りにSOSを発信し協力を求め、全国から応援に来てもらいました。個別で話を聞いてもらったり、親子での制作活動イベントを開いたり、母親のお喋り会や種々のリラクゼーション、ボランティアの交流会、支援者へは自分たちの施術など…。これらの実践からは、「地震が家族関係を見直すきっかけになった」「水のありがたさを痛感した」「平凡な日常生活がいかに大事なことに再認識した」「体全体が軽くなり、緊張がほぐれた」「親同士が繋がっていてSNSで生活情報交換できてありがたかった」等々出てきました。

厳しい状況が続く中でも、赤ちゃんの寝顔やおにぎりをほおぼる子どもの姿に大人が元気を貰っていることに気づかされる昨日今日です。

4か月～半年

熊本地震発災後現在、私たちの住む地域の子育て家庭でもこれまでに経験したことのないさまざまな変化が起こっています。そこで全国から被災地の子育て家庭支援に寄せられた物資や支援金をこれらの家庭に確実に届け日常を取り戻して貰うため、地域で活動するNPOとしてどんな活動ができるか検討しました。その結果、二つの事業を立ち上げることにしました。一つ目は放課後児童預かり事業の立ち上げ、二つ目は仮設住宅に建った「みんなの家」での多世代交流です。

まず一つ目の事業について書きます。これは学童保育事業の開設されていない地域で放課後児童を預かり、健康で安全な時間を作るものです。7月下旬、開設すると

小学1～5年生が10数人集まりました。子どもたちは夏休み期間中ここで日中を過ごすことになります。場所は、旧うどん屋さんの店舗を借りることができました。食に関する体験にはもってこいの施設です。そこで午前10時までを学習の時間にあて、その後昼までは自分たちの昼食づくり活動にしました。毎日の献立はご飯・味噌汁・夏野菜がメインです。

まず洗米ですが、最初の頃は炊く米が半分になるくらい水とともに流れていってしまいました。次は炊飯の水加減です。お粥からごちん飯まで様々…。ご飯が炊けたらおにぎり作り、各自ラップに包んでマイおにぎりを作ります。さまざまな形の芸術作品(?)ができあがりました。自分で作ったおにぎりの味は格別のように1合平らげる子どももいました。

さらに味噌汁作りです。具はナスやジャガイモ、タマネギ、カボチャ等で切った形はさまざま、経験の無い子どもにとって包丁で野菜を切るのは大変な様子でした。手を切る子どもも出てきました。キュウリやトマトは塩を付けて丸かじりです。普段は嫌いな野菜を口にすることの姿が見られ、集団の力を強く感じました。地震後で通常より短い夏休みでしたが、終わる頃には自分でご飯と味噌汁作りのできる子どもたちになっていて自立の第一歩、貴重な体験でした。

半年から

新しい年を迎えました。地震後全国から私たちに寄せられた物資や支援金で立ち上げた二つ目の活動とそこから生まれた新たな出会いについて書きます。

二つ目の活動、それは仮設住宅の「みんなの家」での多世代交流でした。地域に住む乳幼児親子と仮設住宅住民が定期的に同じ空間で過ごすことから生まれる交流ではさまざまな出会いがありました。幼児がよちよち歩くのを側でほほえましく見守る男性高齢者、赤ちゃんを抱っこして「ああ、もう孫が大きくなってしまったけん、赤ちゃんをだっこするのは久しぶり…、かわいい、かわいい。」と目を細める女性高齢者。

乳幼児と高齢者のふれあい、お母さん同士の情報交換、お母さんと親や祖父母世代との会話から生まれる生活の知恵の伝授等々、さまざまな年代の地域の人々がふれあい、顔見知りになれば笑いや顔色が生まれ、何となく温かい空気に包まれます。こんなふれあいの中から、乳幼児を子育て中の仮設やみなし仮設住宅入居者の緩やかな集まりが生まれました。

地震の時妊婦でその後出産した母親が、誰にも話さなくて辛かった思いや乳幼児親子の避難所暮らしで感じた違和感等々、これまで子育てひろばやサロンでは聞けなかった深い思いが、この集まりでは出てきます。その近くでは乳児を小学生が抱っこしたり、幼児が小学生の遊びの後をついて行ったり…と子ども同士の異年齢交流が生まれてきます。

地震はその後の私たちの暮らしに大きな試練と変化を与えました。周りで続く家屋の解体を見ると複雑な思い

で元気がなくなります。しかし、日々子どもとふれあっていると、彼らの言動や立ち居振る舞いに暫し安らぎを覚えます。人が人とふれあうことで一息つけるのです。そんな思いを持った年の始まりです。



ひろばでバルーン遊び

1年を迎える今

あの突然の地震から1年を迎えようとしています。1年目のアニバーサリー（記念日）が近づいてきた、つい先日の事です。子育てひろばに遊びに来ていた2歳の子どもが突然、「地震です、地震です！」と叫びました。地震から1年くらいたった頃から、小さな子どもが遊びの中で心の傷を癒やそうとしてこんな言葉を発することは地震後の支援者研修の中で聞いてはいましたが、突然その言葉を目の前で聞いて「はっ」としました。

大きな余震が続き、安心安全なはずのわが家を「怖い」と感じて入るのを嫌がり、何日も車に寝泊まりした親子。家屋の損壊を目の当たりにし、巨大地震の前にただ立ち尽くすしかかなすべがなかった私たち。地域の避難所での慣れない生活に興奮し、動き回ったり大きな声を出したりした子どもたち…。中でも幼い乳幼児が地震で受けた恐怖感に計り知れません。「地震です！」は発災時に言葉が出ていなかった0～2歳児が、体の感覚として地震を経験し、自己表現できるようになった今、その時の恐怖感や不安感を日常生活の遊びの中で表しているのでしょうか。

さてこの1年間、全国から実にさまざまな温かい支援を届けてもらい、今も届けてもらっています。地震直後の物資支援。遊びを取り入れたプレイセラピー。親を癒やすためのプログラム。そして私たち地域の子育て支援に携わるスタッフに対する支援などたくさんあります。地震をきっかけに、人のつながりのありがたさを実感した1年でもありました。これから復興へ向けて子育て中の親と子のニーズも変化していきますので、支援の形もそれに合わせて少しずつ前進させたいと思います。

被災地で地域の親子を支援する私たちは、以前に同じような体験をして貴重なスキルを持っている人たち、全国で被災地を支援したいと思っている人たち、それらをつなぐ人たちに支えられ、この1年間を怒濤のごとく過ごしてきました。これからも自分たちの歩みで一步一步進んでいきます。